革命の旗

共産主義者同盟
(革命の旗)
中央機関紙

第20号
1980・7・5
定価 100円
(毎月5日・20日発行)

発行人　北沢 香
発行所　赤流社
電話　(03)407-3511
東京都世田谷区千歳
郵便局　私書箱4号
振替　(東京)7-86947

年間定期購読料
開封2500円(送料共)
密封3000円(〃)

弾圧をはね返し、更なる進撃を

6・22同志不当逮捕、24・25不当ガサ入れを弾劾する！

この力を全国へ

迫りくる嵐、革命と反革命の一大激突を闘い抜く、革命の主体的条件を全力で準備せよ

1

六・二三反戦反安保闘争は、エセ「毛沢東思想派」の反ソ祖国擁護主義、日共等の反米祖国擁護主義両者を含む一切の議会主義と一線を画し、偉大な光州蜂起に学び真の連帯をめざしつつ、春期革命的反戦闘争の頂点、八〇年代日本階級闘争の端緒を切り開く闘いとして、断固戦取され、圧倒的成功を納めた。プロレタリア国際主義とプロ独の思想で武装した四百の部隊は、途中三名の不当逮捕をはねのけ、終始戦闘的デモを貫徹しぬいた。

我々は、春期革命的反戦闘争を全力をあげ、精力的に準備し組織する中で、全戦線にわたる日帝の戦争準備―有事挙国一致体制攻撃とプロレタリア階級・人民の日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義革命をめざす革命戦争―武装蜂起の準備をめぐる八〇年代階級闘争の爆発・発展の不可避性を現実のものとしてこの手に感じとった。

社会主義革命の要求を、どこから、いかに組織し、プロ独の準備の闘いを物質化していくのか。帝国主義戦争を革命戦争―武装蜂起へ転化する準備を、どこから始めどのように形成・蓄積していくのか。その回答は、革命的反戦闘争であったし、現にある。革命的大衆行動と非合法組織建設の本格的実践的着手は、ここから開始されたのである。

小西同志虐殺糾弾―階級的報復戦貫徹と指導的同志二名の下獄という党としての試練を抱きつつ、四・二五時局講演会を号砲とし、六・二三反戦反安保闘争へ至る春期革命的反戦闘争の激闘の三カ月間の闘いを通じ、我々は、八〇年代反戦反安保闘争の思想・政治的管制高地を戦取した。これを擁護し、組織・動員面でも管制高地を戦取するために奮闘せねばならない。更に、諸人民闘争、経済闘争の管制高地も戦取すべきである。

我々は、労働者組織、農民組織及び学生組織の例外なく全ての指導権が、日帝打倒・プロ独をめざし「戦争(帝国主義の)反対闘争を承認しかつ実行する能力のある人々の手にうつるような状態」を実現するために奮闘し、諸闘争の爆発・発展と闘争拠点の多面的構築へと向わねばならない。かくして日帝の戦争準備を全戦線で確実に反撃し、第三世界諸国人民との結合を強め深める、と同時に、社会主義統一戦線の舞台をいよいよ大きく広くしつつある労働者・人民の闘いを、プロ独の準備・革命戦争―武装蜂起の準備へ、まっすぐに社会主義革命をめざす闘いへと高め鍛え組織していくのである。

我々は、『革命的反戦闘争を構築するために』①②③で、徹底的にエセ「毛沢東思想派」及び革マルの反ソ祖国擁護主義と日共宮本一派、「平和と社会主義」派、協会派及び第四インターの反米祖国擁護主義を暴き出し、批判する、と同時に、急進民主々義諸派の日帝の戦争準備に対する一面的理解と半

2

かかる成果をふまえ、〈帝国主義と社会主義の分裂〉を一層工業的に推進し、革命的大衆行動創出と非合法組織建設の実現のために現在の政治潮流の分化と再編に注目し、攻勢的にわけいらねばならない。

現在、政治潮流は大きく三つに分化している。第一は、反ソ祖国擁護主義である。社会党・公明党・民社党とエセ「毛沢東思想派」である。彼らは、「経営参加・連合政権」を通じ、独占資本と国家権力にゆ着し、ブルジョア階級独裁を擁護しようというのである。また反ソ主義から日米安保体制と自衛隊を「容認」している。エセ「毛沢東思想派」は、その行動隊である。革マル派が、「ソ連の日本侵略に対し、革命的祖国敗北主義はあてはまらない」といって、反ソ祖国擁護主義に接近している。

第二は、反米祖国擁護主義である。彼らは、ソ連社帝と結合し、議会で多数を制し、「民主連合政権」を樹立し、日米安保体制から日ソ安保体制へ、日帝を転換させようというのである。議会主義とソ社帝美化に基づく反米祖国擁護主義である。最近、日共宮本一派は「相手がいかなる国であれ、日本を武力で侵略するものには、断固として闘う、これこそ真の愛国者の立場」といい始めた。日帝と共にソ社帝に対して闘うというのだ。しかしこれは、ソ連社帝の対日「侵略」はありえないという前提にたった発言であり、ポーズにすぎない。第四インターは、アフガニスタン問題で、大きく二分解し、ソ連社帝のとらえ方の違いを「新たな綱領的確立」にまで発展させるべきだという意見まで噴出し、党的立脚点そのものが問われ、動揺しつつも、ソ連社帝の侵略断固支持が依然多数派であり、親ソ派に違いがない。彼らと日共宮本一派の違いは、政権内容上にはなく、実力闘争か議会主義かの点にある。つまり、第四インターも反米祖国擁護主義の一派なのだ。

第三は、革命的祖国敗北主義である。われわれ、紅旗派、日共(ML)、及びブンド系の多く、中核派、解放派等である。これらは、ソ・米の覇権主義と闘い、日帝の戦争準備と対決し、日米安保体制粉砕・日帝打倒をめざし、暴力革命でブルジョア国家権力を打倒しプロレタリア階級独裁・資本を収奪する社会主義革命へ進撃する路線であるか、その可能性をもつ革命的・戦闘的部分である。

政治潮流の三分化、と同時に、その中における党派再編が急速に進行している。社公民とエセ「毛沢東思想派」、特に労働党によるブルジョア的「労働者」党結成の動き。「平和と社会主義」派が日共宮本一派へ復帰する動き。前衛派とプロレタリア派の統合の動き、そしてブンド系マルクス・レーニン主義分派における統合への動き。

われわれは、第一、第二の反ソ反米祖国擁護主義―社会帝国主義・修正主義潮流との闘いを更に、更に強め、完全打倒をめざさねばならない。そして、第三の潮流に注目し、精力を注ぎ込み、急進民主主義派の教育―改造を闘いとりマルクス・レーニン主義党と社会主義統一戦線へ転化・発展させていかねばならない。第一、第二潮流の党的再編が終了する以前に、第三の潮流をマルクス・レーニン主義派の指導のもとで再編しきっておかねばならない。それには、統合に向けたねばり強い活動、と同時に、四大水路を通じて爆発・発展する人民闘争、その今日的頂点を形成する三里塚・狭山闘争、更に、反戦反安保闘争に対する態度・方針を明らかにし、急進民主主義派との公然たる論戦を組織し彼らの基盤へと進攻し、革命的に再編する闘いを促し、強めねばならない。攻勢的党と統一戦線建設である。

＊　＊　＊

3

われわれは、ブンド系マルクス・レーニン主義分派との統合に向けた闘いを堅持し、着実に前進させつつ、六・二三反戦反安保闘争を戦旗・共産同と共闘し、もって攻勢的党と統一戦線建設の第一歩を踏みだした。更に歩を進めねばならない。実際、戦旗・共産同は旧来の同心円的第三次ブンド建設から、統合を通じたそれへと党建設路線を転換した。党建設の方法・基準・内容を別として、歓迎すべきことである。党建設―統合に対する日和見主義を理論的批判に止どめてはならない。組織実践的批判を強めて、日和見主義の物質的基礎にわけ入り、人民闘争の主導権をこの手に握るよう努力せねば、日和見主義を歎くだけで、いつまでたってもマルクス・レーニン主義党と社会主義統一戦線の物質化の闘いは前進しないのである。

現在、旧共労党系の諸君や第四インターが、反帝人民共闘の建設を提起している。われわれは、攻勢的党と統一戦線建設のための一大政治舞台として、六・二三共闘の成果を基礎に、おおいに利用せねばならない。

革命的反戦闘争を軸に、諸闘争を爆発・発展させ、闘争拠点の多面化を闘いとれ！　そのために自力更生でテーゼと政策を練り上げ作成すること。そのためにマルクス・レーニン主義の第二次ブンド―単一の全国党と社会主義統一戦線建設に奮闘すること。かかる一切の過程が、革命的大衆行動と非合法組織建設の準備へと不断に凝縮されることが肝心である。

〈革命の旗〉を前面に、攻勢的党と統一戦線建設へ進撃せよ！　光州蜂起と真に連帯する道は、これ以外にない。〈革命の旗〉万歳!!

＊　＊　＊

全国の同志・友人諸君に訴える！

『革命の旗』を拡大しよう

全国の同志諸君・友人の皆さん！　わが同盟の先に提起した夏期一時金カンパとともに、『革命の旗』拡大運動に全力で取りくむよう呼びかけます。

今春期、わが同盟の発した革命的反戦闘争の呼びかけは、五月わが同盟と労働者際級・人民の、韓国民衆の民主・統一の闘いに連帯する国際主義的精神と行動を一層着実に促し、強めました。そして六月、これらの闘いは、反戦反安保の大衆的大高揚として六・一五、六・二二の連続的決起へと結実してきました。

今春期、すべての闘う労働者・人民の共通のスローガンとなった日韓民衆連帯！　反戦反安保！　は今、労働者階級・人民の帝国主義強盗戦争・民族解放闘争に対する革命的態度と戦列へ、しっかり打ち固めていかねばなりません。

高まる革命的祖国敗北主義―自国帝国主義打倒、被抑圧民族の自決権支持の気運と闘いをしっかりと日本革命―日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義革命の勝利を戦取する「正規の攻囲」と社会主義統一戦線の建設へと結びつけることを、すべての先進的労働者・人民の任務としなければなりません。

わが『革命の旗』はこの任務の最先頭にたつべく、月二回刊を戦取し、革命的政治煽動の習熟―紙面の充実を計ってきました。われわれの主張は、三千五百万労働者との結合の端緒についたばかりであり、その力は未だ微力であります。しかし、この間の階級情勢の激動と労働者・人民の闘いは『革命の旗』を名実ともに全国的な、規則正しく、ひんぱんに発行され、日本社会主義革命の進路を照らし出す政治新聞へと成長すべき任務とその確信を与えてきています。われわれは全力でこれに応えていく決意です。

わが『革命の旗』を「すべての勢力を統合し、名義だけでなしに、実際に運動を指導するだけの能力のある、すなわち、あらゆる抗議やあらゆる燃えあがりを支持する用意があり、それらを利用して決戦に役だつ戦闘兵力を増大させつよめるだけの能力のある革命的組織」(レーニン)＝労働者階級の単一のML主義党を創建する集団的組織者として、同時に「階級闘争と人民の憤激の一つ一つの火花をふきおこして全般的な火災にする巨大な鍛冶用ふいご」(同)の確実な一部分となる集団的宣伝・煽動者へと高めあげよう！

『革命の旗』を、工場へ、学園へ、全人民の中へ持ち込み、単一のML主義党創建の事業の不可分一体の任務として、拡大運動を全力で取り組もう！

＊　＊　＊

『革命の旗』年間定期購読料
開封二五〇〇円(送料共)　密封三〇〇〇円(〃)

7.11 奄美の自然を守る集会

午後六時　南部労政会館　主催　奄美青年同盟、その他

7・13 中央闘争

関西新空港粉砕・80年閣議決定阻止・三里塚二期工事粉砕

正午　明治公園　主催　淡路国際空港淡路町反対期成同盟　三里塚反対同盟　協賛　動労千葉

春期政治攻防の成果打ち固め

日帝の反動攻勢に対決せよ

6.22

日帝の戦争準備と対決し 韓国民衆連帯の声高々と 四百の戦闘的労働者学生進撃す

清水谷公園へ続々と赤ヘルメットの労働者・学生たちが結集してくる。公園周囲には私服・機動隊が徘徊し、韓国民衆決起に震感しまた赤ヘルのひさびさの登場に弾圧体制をしいている。

六月反戦反安保労学実行委員会は一時から独自集会に入り、朝鮮人民連帯・革命的反戦闘争を闘う決意を高らかに示す。関西から結集した労働者は、全金東大阪枚岡支部労働者の日韓民衆連帯の闘いや、南大阪の争議等を報告しながら、いまこそ革命的反戦闘争の構築の重要さを痛感すると述べた。

二時から全体集会に入る。集会実行委から、本日の六・二二集会の決起主旨が述べられ、光州アピールが読みあげられる。労働者学生は、韓国民衆連帯の意気も新たに「異議ナシ！」と大きな拍手を浴びせる。最初に連帯発言にたった三里塚反対同盟の鈴木氏は、「朝鮮人民連帯に三里塚農民も決起する」との決意を述べつつ、最近の三里塚情勢、とりわけ農協売り渡し策動粉砕が新たな闘いの出発点であると強調された。そして「三里塚闘争はいまや三里塚だけにとどまらない」として、「全国の仲間とともに闘う」ことが必要であると提起された。

次に砂川の宮岡氏の「反安保反戦反基地闘争をともに闘おう」とのアピールが寄せられ、集会は次第にもり上っていった。そして、「戦闘的労働運動の再生」をめざし闘っている『労働情報』を代表して高幣氏があいさつに立つ。氏は、「本日の日帝の戦争準備と対決する労学集会を断固支持する」と表明し、今日の労働運動の右翼的再編に対決し闘い抜くために、ぜひ「本日の集会」や「六・一五日比谷集会」のように、戦闘的労働者の政治的決起が重要であると強調された。

更に続々と発言者が登壇する。管制塔占拠闘争被告、水野氏の父親の発言は結集する全同志の胸を打った。氏は七〇歳をこえた体で三里塚闘争の正義を全国に訴え、自分達の息子や娘は「人民の正義のため闘った。」として、オルグ活動中であることが報告された。

「私は息子が獄中から出てきても活動をやめろとは言わない。いいえ、むしろガンバレとはげます」と訴えられ、全体の熱烈な連帯の拍手を受けたのである。管制塔占拠闘争被告事務局団体の発言につづき、集会実行委構成四団体の代表が力強く訴える。そして、高原氏からの獄中アピール、部落解放同盟埼玉県連からの連帯アピールが読みあげられた。集会後ただちに、戦闘的デモに移った。労学四百名の隊列は機動隊の規制をはねのけ、道路いっぱいのジグザグデモを敢行し、闘う決意を示す。警察権力は不当にも三名のデモ参加者を「公務執行妨害」として逮捕したが、隊伍は更に志気高く日比谷公園まで、戦闘的デモを貫徹した。この日の闘いは全潮流の注目を今後とも浴びるであろう。

機動隊の弾圧粉砕し〝うず巻きデモを敢行！

団結・統一そして革命的行動へ われわれは打って出る！ 東京

全国の労働者のみなさん!! 革命の旗の熱烈な読者諸君!!

去る六月二一日、日韓条約締結十五周年、朝鮮戦争三〇周年弾劾！ 南朝鮮人民の決起連帯、労働者映画講演集会が、六〇余名の都下の先進的労働者の結集のもと勝ちとられた。

本集会は、「闘う東京労働者の会」と「六月反戦反安保実行委(東京)の固い団結のもと計画されてきたものである。われわれは、嵐のような韓国民衆の決起、とりわけ光州武装蜂起に連帯し、労働者階級の進撃をはっきりと日本帝国主義打倒、米帝国主義追放、一掃と固く結びつけ闘いぬく、こうした観点のもと準備してきた。

集会は、労働者階級に連帯の内実を鋭く問う、全国にまたがる朝鮮人強制連行の傷跡を追った「受難の記録」の上映で始まった。次に山川暁夫氏の講演に移り、山川氏は、四・一九革命と対比しつつ現在闘われている民族民主革命が「未完の革命」を受け継ぎ、はるかにそれを上回り闘われていること、維新残存勢力の暗闘と全斗煥軍事独裁体制の不安定性と、テロ的独裁の実体を生々しく伝え、軍事独裁体制は必ず韓国民衆の決起により葬りさられるであろうこと、そして何より、現在、日本の労働者階級の闘いが求められていることを力強く訴えられた。

山川氏の講演を参加者全体で確認する中、「光州のように闘おう」と空港廃港への熱烈たるアピールを三里塚反対同盟から受け、最後に集会主催者団体の発言に入っていった。

すでに不退転の決意を打ち固めた参加者が注視する中、発言にたった両団体は、固い団結が本集会を成攻させたことを確認し、その中で、反戦反安保実(東京)の仲間は、光州武装蜂起に連帯し、何より日帝の対ソ、朝鮮侵略反革命戦争準備にそなえ、革命的反戦闘争の水路を切り開かなければならないことを一点の雲りもなく提起し急進民主主義諸派の没落と反動性を余すことなく暴露し、日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義を要とし、韓国民衆の民族民主革命を断固支持し、二二日、反戦反安保闘争に総力をあげ決起しなければならないと力強く提起し、全参加者は固い決意を一層打ち固め、集会を終けた。

7・20 厚木基地解体 闘争へ決起せよ！

午後1時　場所未定

神奈川 反戦反基地闘争へ 闘いを拡大せよ

今日の情勢の基調をなすものは「戦争と革命」の問題であり、われわれは、当面する日本プロレタリアートの任務について、一貫した政治煽動を闘いぬいてきた。

神奈川における先進的労働者たちも、この間、われわれの六・二二闘争を頂点とする反戦反安保闘争に対して、大きな関心をよせ、今日の日本の政治情勢の中心は戦争問題にあること、迫りくる帝国主義戦争に対して労働者階級としていかなる態度を示すかについて積極的な動きを開始しつつある。神奈川における六・二〇反戦反安保集会は、そのことを反映して、多くの先進的労働者が参加し、闘い取られた。集会は、まず、光州蜂起に連帯し、日韓労働者・人民の共同の意志を示すための、四・一九革命のスライドに始まり、日帝の対ソ、対朝鮮侵略反革命戦争阻止、朝鮮出兵阻止の革命的反戦闘争への決起を訴える六・二〇基調報告を受け、戦闘的雰囲気のうちに開催された。集会には、横須賀で反戦反基地闘争を闘いぬいている市民団体からの代表発言、県北、厚木で闘いぬいている反基地闘争の仲間からのアピールがよせられ、神奈川における反戦反基地闘争が、日帝の戦争準備に反対する革命的反戦闘争と結合し、大きな高揚がつくり出されようとしていることを示した。さらに神奈川労共闘の連帯発言、日韓問題についての講演をうけ、最後に、反戦反安保神奈川実行委が、六・二二中央闘争への決起を訴え、圧倒的拍手のもと、集会は貫徹されたのである。

今日、日帝の戦争策動が激化するにつれ、社会愛国主義、戦争協力者の台頭が全面化しつつある。われわれは、革命的反戦闘争を通じて、戦争に反対する民主主義的憤激を広範な統一戦線のもとに組織し、革命的祖国敗北主義とプロ独・社会主義革命の下に、全人民を動員して闘いぬかなければならない。

すでに神奈川では、革命的反戦闘争の一貫としての反基地闘争が準備されている。われわれは、六月政治煽動戦の成果をふまえ、先進的労働者と団結し、県下における革命的反戦闘争の広範な、大衆的な基礎をつくり出すことが大きな課題となっている。

春期闘争の全成果を 全国学生共同行動の更なる飛躍へ！ 学生戦線

韓国民衆の決死的闘いは、日本学生運動に革命的息吹きをふき込んでいる。

五月末から六月の日韓連帯・反戦反安保の闘いは、七〇年代の分散・混迷の学生戦線にピリオドを打ち、真に大衆的な、確固とした革命的理論に導かれた闘いの再構築を我々の緊要の任務としている。先進的学友によって着手され始めている。形ガイ化し実体のない、「全学連」が学生大衆の自然発生的民主的決起を包摂し、それに政治方向を与えきれないことは明白であり、彼らが今日の学生戦線の再編の主導力でないことは多くの学友が実地教育で見抜いている。

それにかわって、四・二〇通達粉砕・反処分の闘い、あるいは反戦・反基地の闘いが統一しうる課題として浮かび上り大衆的統一行動として実現している。四・二〇集会、六・一五日比谷、関西での学生交流会の実現として共同行動と戦線の再構築が進んでいるのだ。韓国民衆の決起が、こうした学生戦線の新たな高揚に拍車をかけている。様々な集会で「韓国の人々の闘いを見て何かしなければと思い集会に初めて参加した」という声が聞かれる。我々が知りえない更に多くの学友が政治的にゆり動かされ、正義感を奮いたたせ、実際行動への参加を望んでいるのである。こうした憤激を思い切り大胆に組織しなければならない。様々な課題での共同行動のつみ重ねと統一行動を実現し、革命的理論を持ち込み論戦を組織し、八〇年代学生運動の革命的再建の基礎を今作り上げねばならないのである。

我々はその闘いを大きく見すえつつ六・二二「日帝の戦争準備と対決する」反戦反安保の闘いを組織した。いまだ全体から見れば影響力も小さく、政治工作の能力も十分でないが、しかし全力をあげ革命的反戦闘争の構築をめざした闘いを通じて、我々は着実に成果を手にすることができた。と同時に何よりも学生戦線が人民闘争の発展の中で力強く前進を開始していることが明らかとなった。問題は急進民主々義、あるいは現代修正主義日共の政治指導から、多くの学生大衆を革命的理論を導きとし、強固なマルクス・レーニン主義党建設の事業と結びつけ獲得していくかということである。

今春、学生の闘いはこのことを鋭く我々に問うているのだ。学園でのねばり強い政治指導部の建設と大胆な共同行動の組織化。これがいま問われているのだ。共に闘わん！

夏期援農呼びかけ

生活し闘う三里塚 どの交流・連帯を！

「革命の旗」読者のみなさん！

三里塚夏期援農をよびかけます。

毎年、この時期は農家にとってスイカなどの夏野菜の収獲、出荷が始まり、また日を追うごとにのびる雑草をとるのに忙しい時期です。

東峰団結小屋は毎年、夏期援農をよびかけ、多くの労働者、学生の参加を得てきました。援農に参加した方々の感想には、「反対同盟のひとと初めて話しをした」「農家の仕事が意外にたいへんなのがわかった」「長い闘いなのに(反対同盟農民が)明るくて、くったくがないのに驚いた」と様々な感想がよせられました。これらの感想は異口同音に援農に参加することを通じて、三里塚農民を身近に感じることができたことや、集会に参加するだけではわからない、三里塚農民の生活にふれ「闘う三里塚」から「生活し、闘う三里塚」へ三里塚像をふくらませたことを示しています。さらに多くの方々がこの夏、三里塚夏期援農に参加されるようよびかけます。

× × ×

① 援農の申し込み

援農の申し込みは、期間、人数をはっきりとさせ、援農予定日の二日以前に東峰団結小屋に連絡して下さい。

② 服装・持ち物

援農用の作業着を必ず持参すること。(農作業に適した古着、作業服、トレーニングウェアーが適当で、腹をしめつけるGパンは不適当です。)

はき物は、ゴム長、地下たび、運動グツが最適です。

その他、タオル、ぼうし、下着の着替えが必要です。

尚、定期券、手張、身分証明証などは持参しないで下さい。

③ 行き帰り

援農予定日の前日夜までに小屋につくようにして下さい。

小屋の車の送り迎えを希望する人は、成田着の時間を事前に連絡すること。

バスを利用する場合は、京成成田駅前バスステーション⑥番ホーム小見川栗源行きバス「新田」下車。

成田発　七時五〇分　八・一〇　九・〇〇　一三・〇〇　一六・〇〇　一七・三五　一八・一〇　一八・五〇

※東峰団結小屋宿泊無料。食費は実費(一食三百円程度)。

東峰だより

東峰団結小屋　☎〇四七六(三二)〇五〇五

5月31日 国鉄当局は、八〇春闘に関連して動労千葉に対して免職一名、停職十二カ月一名を含む二八九名の処分を通告した。しかし、この処分は四月一五日津田沼機関区において、動労千葉組合員が動労本部―革マルの襲撃をうけた事件を、動労千葉に一方的になすりつけた悪質な政治処分である。

動労千葉は、六月二日から三日間の強力順法闘争を中心に反処分闘争に突入した。

6月7日 去る五月十五日、木の根部落の小川源、小川直克両氏に郵送された芝山町長真行寺一郎の文書への回答が、全同盟に配られた。

回答書は反対同盟名で、町民無視の真行寺町政を批判し、「芝山鉄道といいながら二期工事用地内の土地を提供してくれなどというような文書をよこすことは厚顔無恥もはなはだしい」と真行寺文書の政治的意図を暴露、批判している。真行寺町長は就任以来、公団の手先として働いてきた人物であり、公団が同盟切り崩しの策動を強めていることを示している。

毎日新聞は、六月七日付朝刊一面に「成田二期工事農家移転用公団、代替地を購入」なる記事を掲載し、公団が成田市内に十・七ヘクタールの土地を入手したことを報道した。

しかし、この記事は悪意に満ちたものであり、石橋副委員長の談話を故意に歪曲して「話し合いは何が何でもだめというわけではない」などとしている。反対同盟がこの記事に抗議したところ、毎日新聞は非を認め訂正を約束したが、翌八日付千葉版は「ショック、反応さまざま。闘争おしめーか反対農民」なる見出しのデマ記事をのせ、公団の手先の役割をはたした。

反対同盟は八日付で抗議声明を発表し、権力に奉仕する毎日新聞を弾劾した。

6月25日 成田市内の国際文化会館大ホールにおいて、反対同盟主催の三里塚闘争代表者会議が開かれた。

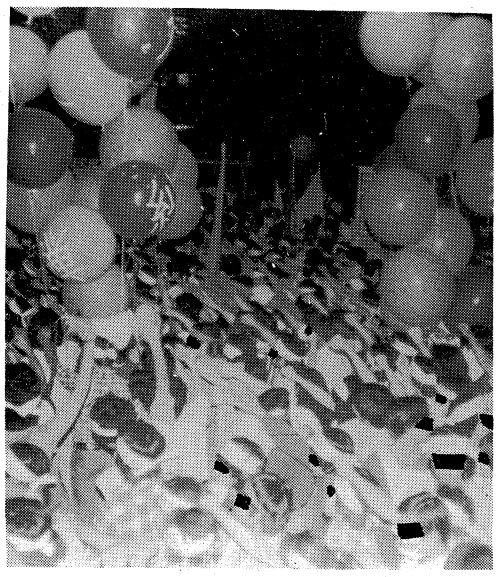
会議は北原事務局長、長谷川たけさんのあいさつで始まり、青年行動隊から、岩山防音工事、闘う農業建設を島寛征氏、全国交流行動を小泉英政氏、飛行阻止・現地実力行動を熱田誠氏十月東京行動を石毛博道氏が報告、提案を行った。

6・28日韓連帯総行動に一千余結集！

我々は韓国民衆の友となれるか！

「私たちは、日本民衆の責任において、日本政府の全斗煥軍政への一切のテコ入れを許してはならない。…日本民衆は、韓国民衆の友であろうとするのか、日本政府の韓国軍政へのテコ入れを許し、韓国民衆の前に銃を持ってたちはだかろうとするのか。われわれの責任は重い。私たち日本人の沈黙と無関心の一つ一つが、そのまま韓国民衆の流される血につながっていることを知らなければならない。

六・二八日本民衆総行動に結集した私たちは、韓国・光州の民衆の闘いに連帯し、日本の侵略と、差別の歴史をつくりかえる闘いを進める。あらゆる闘いの場で光州決起への連帯を表明する。このことを日本民衆の総意とするため、私たちは奮闘することをここに宣言する。」――千人をこえる参加者は、この集会宣言を日韓連帯のみなぎる決意で確認し、外務省へ向けてデモに出発した。この闘いによって光州大虐殺の真実と日本政府の加担があばかれることに心底恐怖した支配者階級と、弾圧の尖兵機動隊は、外務省に対し整然と、しかも断固たる抗議のシュプレヒコールをあびせ、日比谷公園にむかおうとするデモ隊に突如として襲いかかり、三名（総括集会での確認）の仲間をまったく不当にも逮捕した。



集会では、二七日外務省に対して六点の申し入れを行った交渉団から報告があり、「全政府は法律的には合法」「対韓経済援助は韓国民衆のためになっている」など、支配者階級のドス黒い真の姿があばかれた。かけつけた韓民統代表からは、今後の日韓連帯の闘いは日本政府の対韓政策を根本的にかえていく質を持たなくてはならないと強調され、また国連人権小委へ在日韓国人「政治犯」の家族を派遣し、直接会議での発言を実現しよう！という在日韓国人「政治犯」を支援する全国会議はじめ諸団体からのアピール、日本政府をおいつめ廃港をかちとることが韓国民衆に連帯する自分たちの闘いだ！という三里塚青行隊の寺内、小泉両氏の発言、韓国学生に応える日本学生共同行動をつくりあげる！という筑波大の学生など、それぞれの立場から、日韓連帯の内実を問う鋭い提起と、闘いへの決意が明らかにされた。

高原・判決公判へ結集せよ

七月十六日(水)午後一時　東京高裁

十年間にもわたる未決超長期拘留にも一歩も屈する事なく、わが〈革命の旗〉建設に獄中から参加し、党と革命のために一貫して闘い抜いてきた高原浩之同志の判決公判が開かれる。多くの同志・読者諸君の傍聴をお願いする。（なお前号で報告した公判期日七日は表記の通り延期となりましたので訂正します。）

反徴兵反安保・日韓民衆連帯！

500の決起で大阪集会成功す

【大阪発】　革命的反戦闘争の組織化に向け、政治煽動を強化・拡大せよ！

去る六月十四日、大阪の部落解放センターにおいて、「反徴兵制・反安保・日韓民衆連帯」集会が開かれ、約五百名の先進的労働者・学生が結集した。この集会は準備期間が短かかったとはいえ、多数の結集をかちとった。ここに今日韓国民衆決起につき動かされた先進的部分の新たな胎動を予感させられる。集会には、南大阪で工場占拠自主管理闘争を担っている労働者や、東大阪全金枚岡支部第々が結集していた。

集会で、在日韓国人団体は、あの革命的萌芽形態を見せた光州市の事態を知らせる人民の手紙を紹介した。この手紙は、光州の武装蜂起が全斗煥一派の特殊部隊＝空挺部隊の残虐なデモ隊・市民へのテロに対する反抗から始まったことを赤裸々に伝えている。そして全斗煥と軍部は人民の敵であると徹底的に暴露し、五・二七光州反革命制圧の強行は、逆に全韓国民衆の「民族民主革命」への引き金となるだろうし、四・一九未完の革命が勝利する一歩であると結んでいる。

この報告の一つ一つに結集した労働者たちは、怒りと連帯の気持をあらわし、この「朴なき朴体制」を支える日本帝国主義との闘いを更に深めようと決意していった。

このあと山川暁夫氏が講演にたち、今日の韓国情勢と日帝の野望を厳しく客観的な分析のもとに明らかにされた。この中で氏は、衆参同時選挙が大平・カーター会談で決定されている「防衛二法」の年内結着、「中央指揮所＝戦闘指令部の設立をなすためであることが暴露された。これが八二年達成をめざしていることと同様に、ミクロネシアの米軍基地もそうであり、日米共同計画との密接な関係について明らかにされた。選挙はこのための「絶対多数」をねらうブルジョアジーの意図であり、日帝の戦争準備行動としてあると暴露し、日本人民の反戦反安保闘争への決起を強調した。

世界がいま大きく激動し、世界大戦の危機を増大させていると感じているのは私たちだけではない。だからこそ、この集会にわれわれは「日帝の戦争準備と対決する革命的反戦闘争の組織化」をビラで訴え、「革命的祖国敗北主義を整え、日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義革命」の道をともに進もうと呼びかけた。少しづつではあるが、わが大阪の地でも、革命的反戦闘争の組織化のための準備は進んでいる。

寄稿

この文章は、戦闘的な労働運動を指導しつつ、日本革命に向けた礎を形成せんと、日夜努力されている一読者から寄せられたものです。ひきつづき多くの読者からの寄稿をお願いします。（見出しは編集部）

港湾合理化に抗して

革命の勝利へと労働運動を戦闘的に牽引せよ！

全港湾横浜分会・K

港湾の合理化は、一九六七年、日本初のフルコンテナ船「箱根山丸」の横浜～北米間就航によって本格的に開始された。五〇年代のエネルギー産業合理化再編から大工業の合理化再編へと進んだ産業再編の総仕上げとして、運輸通信の徹底的な合理化が支配階級ブルジョアジーによって呼号されたのがちょうどこの六〇年代後半にあたる。フルコンテナ船の就航すなわち「陸海複合輸送一貫体制」のめざすものは、いうまでもなく、永年労働力集約型産業としてあった港湾運送業の装置産業化への改変の実現にあった。

かつて在米貨物船一万トン級の荷役に七昼夜、のべ人員一二〇〇人を要した港湾荷役をこのフルコンテナ船は、一昼夜五〇人程度へと、驚くべき合理化をやってのける海運資本の新たな合理化戦略の武器として登場したのである。

しかしながらこの時期に日本の港湾労働者はほとんど有効な反合理化闘争を展開しえていないのである。

これは、政府・海運独占資本によって巧妙に用意された港湾運送事業法という港湾業者保護法によって港運業の零細性と各海運資本系列ごとに細分された重層下請体制の下で港湾労働者の団結基盤が破壊され、労働者の産業別結集を阻害する体制が完成していたことによるものである。とりわけ一九六七年段階での港湾における現場労働者の七〇%～八〇%が非本工―日雇労働者であった事実との相関において、いわんや残る二〇―三〇%の「常用労働者」といえども実体は「直行」「顔付け」と呼ばれる半日雇労働者であったという現実が、一層決定的に、このコンテナ船―「現代の黒船」と呼んで港湾労働者を恐慌におとし入れた革新船への反対闘争を封殺し、海運独占資本は何らの抵抗もうけずにこのコンテナ船就航を易々と実現していったのである。

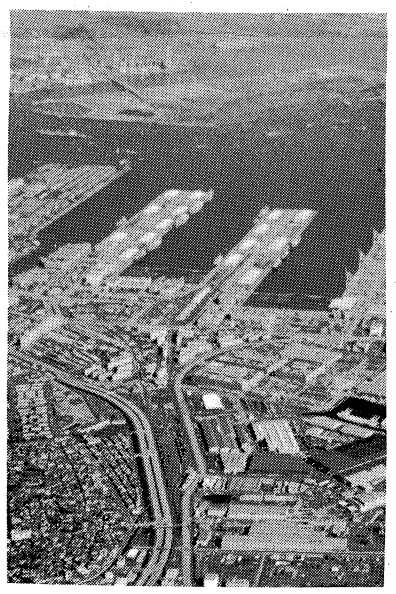
時期は前後するが、全港湾が全国闘争として制定闘争を展開していた「港湾労働法」が一九六六年七月一日に施行された。港湾労働法は、先述した港湾労働者の雇用状態を改善し、本工化と日雇い労働者の登録制を通して暴力手配師のピンハネと暴力的労務管理を排除し、港湾現業労働者の団結基盤を形成しようという闘いであった。

全港湾が主として元請労働者のみによって構成されていた限界を突破しようとする意図は極めて階級的には正当なものであった。全港湾はこの「港労法」施行直後から全国一万五千人にものぼった登録日雇労働者の組織化に全力を挙げ、即時的戦闘性はあるが労働運動の洗礼をまったくうけていなかった日雇い港湾労働者の組織化に九州から東京港までの六大港全部で成功したのである。六大港の日雇労働者は、暴力手配師との実力闘争や地方、中央政府の団結破壊に抗して善戦し、港運業者との集団的団交権の確立をはじめとし賃金闘争、就労保障闘争などを港湾や埠頭の実力封鎖戦術をあみ出して次々と実現し、反合理化闘争の起爆剤として自己を形成していったのである。

こうした中で、港湾での反合闘争は七〇年代に入って、港湾反合共闘会議の全国的規模での結成となり、横浜では七〇年春闘ではじめてコンテナ埠頭のピケ封鎖戦術が、海運―港運資本に打撃を与える戦術として行使されていったのである。七一年以後、長いときに七日間昼夜にわたって、日雇労働者のコンテナピケすら敢行されるにいたり、またコンテナ関連労働者、トレーラードライバーや、バンキャリーなどの荷役装置のオペレーターが全港湾に結集して内部からの闘いを開始した。船と日雇の組合といわれた全港湾横浜も、今日、コンテナ化から十年をへてドライバー・オペレーター労働者の比率を除々に増大し、果敢で大胆なストライキを展開するに至っている。

また一方では、反合共闘会議は全港湾以外の中立系組合の危機意識と全港湾の統一戦線戦術の結果として全国港湾労組協の結成へと発展し、港湾では規定力の微弱な同盟派をも巻きこんで、港湾ゼネスト体制を確立する一方、要求の統一、行動の統一、そしてゼネストをスローガンとして、最低保障賃金制度・港湾年金・合理化事前協議制の協約化を勝ちとりつつある。その柱は、海運資本との対決をめざす、すなわち背景資本、真の敵との対決をめざすという運動性格の定着にあると同時に、フライニング・ピケット戦術（押しかけスト）の行使という、日本型企業内組合運動とは全く異なる運動に裏づけられている。

今日、労戦の右翼再編といった動向の中で、あるいはまた社共中軸体制の崩壊、社公民路線への転換の中で、階級的原則につらぬかれた労働運動の勢力としての登場が求められているのである。そしてまた、果しなき反合闘争の出口は唯一、プロレタリア独裁、革命の勝利へと労働運動を戦闘的にけん引すること以外にない。労働運動が公然とブルジョアジーの打倒と革命を語る、そのことをめざして闘う共産主義者は工作を遂行しなければならない。



読者からの通信

あァー終った！企業ぐるみ選挙！

造船労働者・28歳

「あァー終った。」こんな声が職場全体をおおっている。

史上初めてといわれた衆参同時選挙は、社公民そして日共の予想と「期待」をことごとく裏切って、自民党の圧倒的勝利のうちにその幕をとじた。私達にとっては議会主義政党の「躍進」・後退など論ずるだけ時間のむだだが、しかし、民社＝同盟系支配下の労働者にとってはこの民社党の「躍進」・後退は大きな問題をふくんでいるのである。

票＝「力」の各議会政党は、この「力」を得るためにはどんな卑劣な手段をもいとわない。とくに、元統幕議長くりすをおし立て、今選挙の目玉に防衛問題を掲げた最右翼野党民社党の〝企業ぐるみ〟選挙はあまりに有名である。

では、この〝企業ぐるみ〟選挙はどのように進められたのであろうか？ 私の働いている〇〇工場内の××労組は、まず初めに民社党への選挙資金カンパを行った。天引き強制カンパではなかったが、カンパを行なわないことがどのような結果としてあらわれるかをよく知っている労働者達は、その〝非〟強制カンパに応じ、約百五十万円を取られたのである。次は、××労組支援候補者後援会への強制加入である。××労組員は、当然のことながら全て強制的に加入させられる。それ以外に十名の会員集めが労組員一人一人に強要され後援会員名簿に十名の名前・住所・電話番号を記入して組合に提出することが義務づけられている。なお、前回の選挙では一人五名の会員集めであったが、落選してしまったために今回は一人十名にはねあがったとのことである。この後援会強制加入によって一応〝当選〟のメドをたてた後は、各地域情宣・各家庭オルグへの動員である。多い者は週に三回、少なくとも二回は休暇をとらされて参加させられた（こんなに休んでは生産に支障をきたすのでは？ などという心配はいらない。これが〝企業ぐるみ〟のゆえんなのだ！ また、いくら選挙活動で休んでも出勤率にはひびかないように労資間で協定が結ばれているのである）。これだけではすまない。例え出勤した日でも、就業時間以降約二時間は選挙活動のために身がらを拘束されるのである。これが投票日前日まで続けられる。そして投票日当日、これがまた大変である。労組選対より各組合員宅に早朝より電話が入られ、投票に行くことと自分が集めた後援会加入者へ電話連絡し、△△候補に投票するように「依頼」することが指示される。投票へ出向き、投票を終えて出てくれば××労組の腕章をした選対員が組合員一人一人をツェックし、名前と所属課のノートへの記入が行なわれる。これで組合員が投票に来たことが確認されるのである。

こうして強制された選挙「闘争」からやっと組合員は解放されることになるのだが、それは一時的な解放にすぎないのである。

実はこの××労組支援候補者は見事に落選してしまったのである。その結果、次回の選挙がどうなるかは明らかである。一人十名が二十名になり、組合による拘束が更に増されることは火を見るより明らかなのである。

職場に流れる「あァー終った」の声はこのような〝企業ぐるみ〟選挙の苦しさから一時的にではあれ、解放された心情の表現でありつつも、また一方で、戦争準備と反動に向けた右翼的「労戦統一」に対する不満と反抗の素地を深めていくものにつながっていくだろう。

労働者大衆の階級的直感は健在

電気労働者・23歳

私の働く職場は、ある大手電機メーカーの下請け工場ですが、京浜工業地帯に数知れず存在する他の小・零細と同様、組合さえありません。低賃金にアップアップしながら残業に追いまくられる毎日です。

このように、日々生活におわれる毎日ですが、私達のところにも世の中の動きは様々に反映します。昼休みの野球や競馬の話のあい間に、なんのはずみか「政治」の話が出てきたりしますが、「人質救出」という名目で、米帝がイランを武力挑発したとき、あるパートのおばちゃんが「戦争が始まるよ。イヤだねェ」としゃべり始めますと、同世代のオジちゃん達も加わってたちまち話の輪が広がりました。

そこには漠然とではあれ「戦争の接近」への予感が確かに存在するし「戦争はいや」「戦争で得をするのは金持ち」といった直感的ではあれ、階級的発展性があります。

真の労働者階級の政党とは、労働者の抱くこうした直感を正しく発展させ、彼らにそれを自からの階級的立場として貫かせうるような存在、労働者をそのように政治教育し、またされる存在のことを言うのではないでしょうか。

「反戦」をいかに闘うかという課題は、今日の労働運動の右傾化と対決しようとする者にとって不可欠の課題です。そして、言ってしまえば今まで「反戦平和」を主張してきた「指導部」がやってきた労働運動こそ、小・零細に働く労働者を無権利状態に放置してきました。だが先にのべたように、直観は健在であることを、多くの闘う仲間に思い至って欲しいと思います。

＊＊＊

分水嶺ひく安保

反戦反安保の闘いが燃えあがり、日帝の戦争準備・反動諸攻勢に対する反攻戦が拡がっている。だから、闘いを指導する政治党派にとって、日米安保体制をいかに位置づけ、どのように闘うかは優れて日本革命の路線問題である。すなわち闘いの矛先が一層とぎすまされるか否か、労働者階級を主軸―原動力とした広範な人民の組織化が可能となるか否か、また被抑圧民族と真に連帯する闘いができるか否かを問うこととなる。これは古くて新しい問題である。

日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義革命の総路線の下

日米安保を打ち砕け！

反戦反安保をめぐる諸政治勢力の混迷を打ち破るために

韓国民衆の歴史的決起　は、激しく日本プロレタリア階級の政治的自覚を燃えあがらせている。

日本帝国主義の体制的危機の探まりと帝国主義戦争準備に対決し、反抗を強めるプロレタリア階級の闘争が韓国民衆の決起に勇気づけられ、日韓連帯の闘いとこのプロレタリア階級の反抗戦が合流し反戦反安保闘争の一程の高揚となって出現している。五・六月と連日のように首都で地方で韓国民衆の決起に応える集会が開催された。しかもそれらはおしなべて「予想を上回る」結集を闘い取っている。「十年ぶりの活況だ」「新しい時代の高揚が始まった」という認識は多くの先進的プロレタリアートの共通した実感となっている。六・二三の「日帝の戦争準備と対決する労学集会」はこの新たな闘いの高揚の最前線を形成するにふさわしい戦闘的闘争として貫徹された。

だがこうした人民闘争の高揚する時代は、あらゆる政党の指導を容赦なく試練にかける時代でもある。かつて反戦反安保・平和運動の旗手を自認した社会党は早々とブルジョア階級に白旗を掲げ投降し連合政権を夢見て「非武装・中立は連合政権の障害となってはならない」と公然と安保容認を主張している。また、「真の革新」から「真の愛国の党」へ転落した共産党はブルジョア民族主義の立場から安保に反対し、小ブル的戦争反対を主張し、日帝の帝国主義的野心を陰ペイし美化している。おしなべて彼らは議会における取引きの材料として「反戦反安保」を口先きで唱えているにすぎない。ここ数カ月の階級闘争の事態は、プロレタリア階級の内部に、日韓民衆連帯、反戦反安保を闘うか、それとも安保容認―「連合政権」構想を認めていくのか、という分水嶺をつくりだしつつある。

だが、ほうふつとわきあがるプロレタリア階級人民の反戦反安保闘争の高揚を前に、急進民主々義―反スタ・トロツキズム政治勢力の分化と再編、衰退は激しく進行している。社共の反戦反安保闘争からの召還は論外としても、中核、第四インター、ブンド系諸派の召還は日米安保体制への過少評価、ひいては、それに対する日和見主義的態度に帰因している。

権力問題としての日米安保体制

広範な人民の反戦反安保の闘いへの決起と急進民主々義諸派の安保闘争からの召還という事態は、日米安保体制を一体どのように把握するのかという原則問題を提起している。かつて第二次ブンドは(そして今日においてもブンド系諸派は)日米安保を日帝と米帝の国際反革命同盟と把えていた。それは、この日米安保を日帝の軍事外交政策の一環として把握するということであり、日米安保を権力問題として把え、日本革命の前進と不可分に結びつけて位置づけることはなかった。日本革命の権力問題として安保粉砕の闘いを組織することなく外交政策として見ることは、日米関係を単純日帝自立論に基づく対等な同盟関係として把えるということであり、日帝の第二次帝国主義戦争以降の歴史的特殊性を正しく踏えていないことの証明であるといえよう。実際安保体制の成立とその再編と強化は日本帝国主義の戦後復興とブルジョア階級独裁の再確立と強化の核心をなしている。

急民諸派の日和見主義批判

戦後米帝占領軍による、革命的人民闘争の抑圧と一連のブルジョア的諸改革によって、支配階級としての地位を打ち固めたブルジョア階級は、五〇年代初頭にブルジョア国家として独立し、急速に中央集権的国家機構を整備強化しもって強蓄積と独占資本主義の発展をおし進めた。しかし、この独立は米帝の支配を除去したものではない。逆に広汎に残存させ、日本のブルジョア階級がそれに依存し、補完され、かつ一定支配され従属するものとしてあった。これは日本の独占ブルジョア階級が米帝をして自己の帝国主義的復活をおし進めるための後盾とし、そのことを通じて形成されるのが米帝のアジア戦略を補完するという体制＝日米安保体制である。

独占ブルジョア階級はこうして、日米安保体制下で独占資本主義の急速な発展と金融寡頭制の確立、それに照応する上部構造の反動的整備をおし進めた。労働運動における日和見主義、改良主義を育成し、小ブルジョアを引きつけて帝国主義的復活をとげていったのである。六〇年安保改訂は、こうした日米安保を背景に復興し世界資本主義体制に組み入った日帝が、アジアにおける米帝の中国・ソ連・朝鮮包囲、新植民地支配を補完し、あわせてその下で対外膨張の基礎を形成せんとしたものである。そのため安保を従属的軍事同盟へと再編し、依存と補完一定の支配と従属の中で、国内面の比重を縮少しつつ、米帝のアジア支配と日帝の対外拡張の面でのそれへ重心をうつすものとなったのである。

従属的同盟関係と日米安保体制

日帝は安保体制の下で資本の大規模な集中、重化学工業を中心とする独占体と金融寡頭制を飛躍的に強め、欧州市場への割り込みと六五年日韓条約を突破口として、アジアへの新植民地主義侵出を一途におし進め始めたのである。七〇年安保は、しかし、日米関係を対等な相互条約として改定するものではなかった。帝国主義としての全特徴を露わにし、その国際的地位を築き上げつつ、これとて米帝の後盾の下で、また、米帝に補完されつつ、その枠内での勢力圏の拡大、再分割戦として進行せざるをえないのである。それは米帝に比して依然二流の帝国主義日本と、ソ社帝と世界支配のための覇権争奪を直接に帝国主義戦争として発動しうる力を保持する一流帝国主義米帝との相互の地位・力の相互関係が反映され、日米安保体制の規定性となっているということでもある。この日米安保体制の規定的要素たる問題を不問にし、米日帝の勢力圏をめぐる対立が直接的に安保体制という関係をつき破って発展するという中核派の立場や、日米帝の侵略・抑圧・反革命のための同盟という外交政策と見るブンド系諸派・革労協・第四インター等は日和見主義である。これは、日本の国家権力の問題として安保体制を把えず、日米安保体制が対外的に他民族抑圧・収奪と社会主義国包囲のため、国内的には社会主義革命に対する反革命のため存在していることを一面的にしか把えきれていない。被抑圧民族の民族解放闘争と連帯し、日米安保体制粉砕を進めるためには、必ず日帝打倒をめざす闘いに不可分に米帝追放を結びつけてこそ、被抑圧民族の利益と、わが国プロレタリア階級の利益を一体のものとして推進し、真の国際主義の立場たりえる。この社会主義革命に結びつけられた米帝追放の任務を曖昧にして、日米安保粉砕の闘いを進めるということは、結局、今日の日帝の戦争準備の要となっている日米安保体制を、帝国主義という社会制度から切り離し、日帝にとって可変的政策として見なしているということである。それ故、ここからブルジョア国家権力打倒の闘いに対する日和見主義を生みだす。これでは被抑圧民族と真に連帯することも、わが国プロレタリア階級を、プロレタリア階級独裁樹立に向けた発達を促すことはできない。

反帝国際主義の旗を掲げて

日本のプロレタリア階級がブルジョア階級独裁の支配と真正面からむかいあうということなのである。だからこそわれわれは、日帝打倒・米帝追放でなければならないと主張し、プロレタリア階級を主導勢力として米帝追放の闘いをおし進め、日帝打倒の不可欠な闘いとして位置づけるのである。こうしたことは、日米安保が現にブルジョア階級独裁の国家権力に、超法規的に作用していることに集中的に表現されている。自衛隊が日米安保によって在日米軍と固く結びつき、その実質上の指揮下に入っていることなどその具体的あらわれである。また、この安保を要に間の日帝の戦争準備が、この安保を要に進められ、国防・防衛論議の例えば「中期業務見積もり」「防衛二法」「有事立法策動」が日米安保協下の「日米防衛協力のためのガイドライン」に沿って進められている。こうしたことは、日米安保体制を日帝の外交政策として把握することでなく、まさにプロレタリア階級にとって日帝打倒・プロレタリア階級独裁を樹立していく権力問題から把握していくことを不可避に示している。

だからこそ、われわれは、第一次、第二次ブンドの政治指導の急進民主主義を止揚し、ブルジョア国家とプロレタリア革命の観点を正し、日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義の総路線を整えてきたのである。くり返しわれわれは主張するが、中核派、革労協、第四インター、ブンド系諸派はこの観点を曖昧にしている以上、社共の小ブル平和主義を根本から批判しえない。

今日、ソ社帝のアフガン軍事侵略、ベトナムのタイ侵攻、ソ社帝の世界的規模での進出と米帝の日・西欧帝を動員しての巻き返し戦略は、第三次帝国主義戦争の危機を日々増大させている。五月一日の日米首脳会談、五月十三・十四日のNATO外相会議、六月サミットはすべて米帝を盟主とし、対ソ防衛分担の政治軍事問題を主題として開催された。こうした米・日・西欧帝の動きに対抗し、ソ社帝は五月十四～十五日、ワルシャワ条約機構会議をもって応えている。こうしたソ米覇権争奪戦に安保体制でもってガッチリとリンクされた日帝は、それ故、ソ―米・日帝国主義戦争を見すえ、安保の再編を急いでいる。同時に韓国民衆の決起、南朝鮮における民族民主革命の前進と南北自主的平和統一闘争の前進に対し、アジアにおける植民地支配と社会主義国への対抗、更に、日本プロレタリア階級の反抗戦の増大・社会主義革命の圧殺と反革命のための安保体制の再編と強化が戦争と反動の基軸として進行しているのである。だから、帝国主義戦争準備が現にもたらしているプロレタリア階級への荷重の中から、人民闘争の様々な水路で闘いに決起する先進的闘士たちを、帝国主義戦争準備に自国帝国主義打倒、革命的祖国敗北主義で武装させ、安保粉砕の闘いを日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義革命という戦略的方向で闘いぬかねばならないのである。

※　※

国内評論

ダブル選挙顛末記

議会で何がおこったか

六・二三労学実行委の闘う四〇〇の隊列が、韓国民衆決起連帯を掲げ、日帝の戦争準備と対決する反戦反安保闘争の圧倒的デモンストレーションを展開しているその日、前代未聞の「首相不在・衆参同時選挙」が挙行、意外(?)にも、自民党の圧勝という結果がもたらされた。

昨年十月総選挙における自民大敗（公認候補の当選者が過半数を割る）以降の「保革伯仲」政治から、「保革逆転―連合政権」論議の喧騒をへて、ブルジョア政治は議会内の沈静化を伴い、戦争準備―軍備増強と反動攻勢の合意すら取りつけられようとしている。すでに自民党は「この勝利に驕ってはいけない」と余裕を見せ、ポスト大平をめぐる権力抗争を開始しつつ、「政権党としては自民党以外にないことを国民は判断した」とばかりに、議会内野党勢力をより一層ブルジョア階級独裁への忠勤者へ仕立てあげ、挙国一致の反動攻勢・戦争準備へ打って出ようとしている。

二度の総選挙を通じて明らかになったように、社公民共の絶対得票率（得票／全有権者）はほぼ横ばいを示しており、（その意味では同時選挙と天候は確実に自民党に有利に作用した。）「保革逆転」も「連合政権」も含めて、ないに以上、プロとアマの選挙戦ともよべる代物であり、薄汚れたセミプロのような社公民共が「勝利」できるわけがない。ちなみに、新自由ク・社民連の伸長（全国区特有の革新無所属の高位当選も含め）は、国会内の（合成着色料の有無はともかく）清涼飲料水以外の何ものでもない。

労働者・人民自身、議会が単なる「おしゃべり小屋」でしかなく、実際の政治はその舞台裏で演じられていることを知っており、「現世利益」と「ドブ板政治」は対応しようもなく、高度成長の終焉以降、資本主義の擁護と延命を旗印にする限り、労働者・人民の不平・不満を吸収しようと思っても、所詮ブルジョア政治委員会たる自民党の陰でしかない。つまり、小ブルジョア階級の動揺も、本来のプロレタリア階級から分離した特殊なブルジョア的社会層たるブルジョア的「労働者党」結成の気運も、労働者・人民にとって何ら現状変革とは結びついていないことが、大衆的に明らかにされているのだ。それ故、投票率の大巾アップも、「投票日だけの主権者」というブルジョア階級独裁の支配として最良の外皮たる議会制民主主義を改めて確認するにとどまった。

だが、こうした無力で反動的な議会内野党勢力の存在こそ、ブルジョア階級にとっては好都合である。「保革逆転」の影におびえた彼らは「自由と民主主義を守るなら（資本主義とブルジョア階級独裁を守るなら！　と読め）」と彼らなりの「連合政権」の歯どめをかけるのに必死であった。しかしそれは、文字通り杞憂だった。民社党は、くりすを押し立ててファシストまがいの選挙戦をやってくれるし、あまつさえ自民党大勝である。しかしこれは、決っしてブルジョア階級の支配の安定を示したものではない。

労働者・人民は、議会をめぐるブルジョアどもの空文句や、「社共政権を！」（第四インター）「全野党（社公民？）で自民打倒を！」（労働党）というような社会帝国主義と社会愛国主義のペテンにまどわされてはならない。迫り来る第三次帝国主義戦争の危機という時代状況の中で、議会制民主主義に望みをたくすことは、何ら労働者・人民の階級的利益をたぐりよせるものとはならないことが、今回の同時選挙によって一層明らかになったではないか。

彼らの「政策」はほとんど投票行動には表現されず、「いつでもどこでも清潔な共産党」も同様であった。選挙技術も党勢も伸びきった上での今回の同時選挙は、「金権腐敗」が唯一の争点でしか

同盟の出版物

▼長　征（創刊号）
――綱領草案、規約、第一回大会政治報告　六〇〇円

▼革命的反戦闘争を構築するために
――反ソ反米社会愛国主義を打ち砕け！　四〇〇円

▼都区職労働運動の革命的再生を！
（同盟都委員会発行　シリーズ No.1 No.2）
――公務員労働運動の階級的位置と任務を問う　一〇〇円

▼女性解放をめぐる情勢・戦術テーゼ　（近刊予定）